

歴史と風景から「みなとヨコスカ」の魅力を探る講演会 ーみなととその風景からみた横須賀の魅力ー

平成27年7月11日、国土交通省国土技術政策総合研究所、関東地方整備局東京湾口航路事務所、土木学会土木史研究委員会主催、横須賀市後援で、歴史と風景から「みなとヨコスカ」の魅力を探る講演会が、横須賀市のヨコスカベイサイドスポットで開催されました。講演会では4名の講演者の方に「横須賀の魅力ーみなとが育む風景」「海と船が見える坂道ー横須賀の地形と歴史が生み出した風景ー」「海の関所横須賀港ー東京湾要塞から浦賀水道航路」「海軍が残した遺産ー横須賀軍港水道半原系統」についてご講演頂きました。当日は休日にもかかわらず、約200名以上の参加を得てたいへん盛況なものとなりました。

1. 横須賀の魅力を探る —「港」「地形」「国防拠点」

横須賀市の魅力については既に発刊されている優れた書籍や写真集などで詳しく語られています。今回の講演では上記3つのキーワードで横須賀の特徴を考察します。

2. 港

ヴェルニー公園をはじめ、F倉庫や海上自衛隊艦船補給処食糧庫など戦前の特徴的な倉庫群が港湾部に点在しています。また、久里浜港に1969年に整備された東京電力横須賀火力発電所の排気塔などは港の重要なランドマークとして活用できる貴重なランドスケープ遺産と言えます。



久里浜田浦線深礎擁壁（阿部倉）

3. 地形

上町台地、大楠など丘陵性の地塁山地が卓越する地形を反映し、擁壁やトンネルなどの特徴的な構造物が市内に多数存在しています。市内の主要な幹線道路である久里浜田浦線の阿部倉地区や安浦下浦線の粟田地区には円柱の連続する外観が目立つ深礎擁壁が整備されています。また、“谷戸”を横断するトンネルも多数存在し、それらを集めた「横須賀トンネルマップ」も作成されています。特にJR田浦駅のドアカットは名所と呼ぶに相応しい事例と言えるでしょう。これについては自分も注目しており、奈良文化財研究所(2013)



JR 田浦駅のドアカット

「パブリックな存在としての遺跡・遺産」にて「明治時代に軍事鉄道として整備され、戦後の急激な宅地化によって東京圏の通勤鉄道へと変貌する横須賀線そのものの歴史が深く刻まれた風景」として紹介しています。

4. 国防拠点

江戸中期に浦賀に奉行所が整備されて以来、横須賀製鉄所や海軍工廠、1884年の横須賀鎮守府の設置など、横須賀は軍都であると同時に重要な国防拠点として位置づけられてきました。その歴史を示す貴重な国防遺産が市内に多数現存しています。猿島砲台と千代ヶ崎砲台は今年国の史跡になりましたが、その他の関連施設に対する価値づけも今後議論されていく必要があるでしょう。特に原形維持におけるポイントや活用手法などについては慎重に検討される必要があります。



千代ヶ崎砲台

5. おわりに

横須賀の姉妹都市であるイギリス南岸のMedway市は、横須賀同様に国防拠点として発展した都市です。市内には国防遺産の優れた活用事例があるほか、同沿岸部ハンプシャー州にある「Spitbank 海堡」は、原形をしっかりと維持しながらも別用途に見事に活用されています。姉妹都市にこのような「学ぶべき知恵」が多数埋まっていることはまさに現代の横須賀の「幸運」と言えるでしょう。使える知恵は食欲に吸収するという明治以来の日本人の意気込みを、今度は国防遺産の活用というジャンルでも大いに発揮したいところです。



Medway 市における国防遺産の利活用例

みなとまち横須賀の魅力とは

地方創生が叫ばれる昨今、地域の活性化のためには、その魅力（個性）を再発見し活用していくことが必要となってくる。今年、横須賀港が開港 150 周年を迎えるにあたり、みなとまち横須賀の魅力（みなとまちらしさ）について考えてみることにし、ここでは、①海と船が見える坂道、②独特の風情を持つパン屋、③角打ち、④米国文化の 4 つを取り上げる。



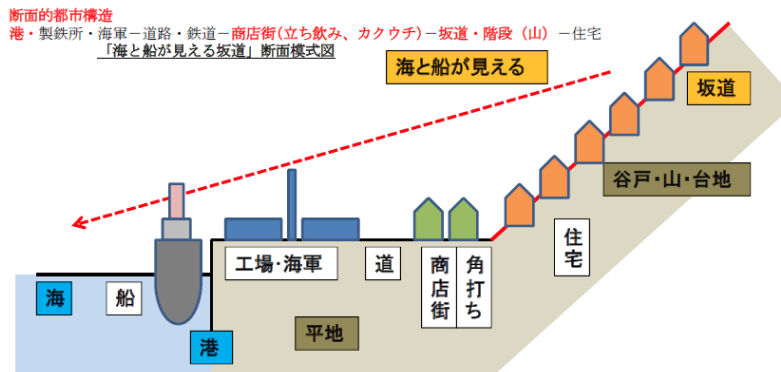
「台地・平地連絡路型」の坂の例

目の前は横須賀製鉄所跡地（現在は米軍）。



「住宅地内型」の坂の例

戦後開発された丘陵地内住宅の一直線坂



「海と船が見える坂道」断面構造模式図

「海と船が見える坂道」として 124 坂を抽出

横須賀港は、函館、長崎などと同様、背後の山がそのまま海に落ち込む天然の良港であり、このため坂が多いという特徴を有している。そこで横須賀市東京湾側の 12 地区 168 坂を踏査し、「海と船が見える坂道」である約 3/4 の 124 坂を含む「海と船が見える坂道」マップを作成した。

横須賀では 150 年前の開港以来、平地の少ない場所に都市が発展してきた。臨海部には工場、海軍が立地し、人口増のため丘陵・谷戸に宅地開発が行われた。その結果、その間を結ぶ坂道、階段が発達した。抽出した坂道は、その成り立ちから①広域道（浦賀道・国道 16 号線等）、②寺社（近世）、③住宅地内（近代・現代）、④台地・平地連絡路（近代・現代）の 4 類型に分類できる。

みなとまちらしさは意外なものの中にも

丘陵・谷戸の住宅地と臨海部の工場等の間には商店街、角打ちが発達した。角打ちとは北九州などにも見られるが、臨海部の工場などで働く人々が、その一角で酒を飲めるようになっている酒屋の形態である。また商店街には、ソフトフランスパンと呼ばれる丸くて柔らかなフランスパンなどを売るレトロなパン屋が点在している。このパンは大正時代に遡るとも言われており、ハイカラなみなとまち文化の名残と考えられる。

誇りを持つとともに楽しむ

このように地形とともに生活の意外なものの中に残っている横須賀の「みなとまちらしさ」について情報発信し、地域活性化に結びつけたいと考えている。市民の皆さん方も是非、自ら歩き、みなとまち横須賀の個性を発見し、誇りを持つとともに楽しみ、情報発信してもらいたい。

国土交通省関東地方整備局港湾空港部
港湾物流企画室長 野口孝俊

みなと横須賀は近代化遺産の宝庫

ペリーが久里浜に上陸し、日本が開国して以来、横須賀には産業振興・軍事関係施設が多く建設され、現在でも多くの施設が使用されている。人間が作り出した「人文景観」特に明治時代の煉瓦造りの建物が多く残され、横須賀製鉄所や浦賀ドックなど港に関係する施設や東京湾要塞と呼ばれる軍事施設も多く残されている。「東京駅復原」「富岡製糸場」「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録と近代化遺産の風が吹いている。



横須賀線田浦隧道（現役）

海から見える景観

平成 26 年 10 月の晴れた午後、第二海堡から珍しい風景がみられた。「東京湾に浮かぶ船、浮かぶ富津火力発電所」東京湾にも蜃気楼が出現した。海から陸をみる風景は機会が少ないが、非常に珍しい光景も見られることができる東京湾は「自然景観」も美しい。



第二海堡からの蜃気楼（H26.10.20）

東京湾要塞のひとつ「第二海堡」

横須賀市内と沖合には20を超える砲台が築造され国土防衛の任務を担っていた。神奈川県横須賀市と千葉県富津市の間には大型船舶の航行可能な深い地形が溝のように繋がっている。ペ



東京湾の湾口に作られた海堡



第二海堡（H27.3）

リーもこの浦賀水道航路を使って品川沖まで進攻した。第一海堡から第三海堡は日清・日露戦争の時代背景により築造され、外国船が東京湾への入湾を阻止するために航路を挟んで海上要塞が順番に築造された。

「第二海堡」昔は外国船を攻撃する施設、今は外国船の安全を守る施設

第三海堡は航路に近接しており船舶座礁が続いたために撤去された。兵舎や防波堤のケーソンは引き上げられ、横須賀市文化財として展示されている。第二海堡は長年の波浪により人工島護岸が崩壊・浸食されていることから保全工事を実施中である。工事では崩壊していない個所を可能な限り保存する整備方針とし、崩壊したところは調査記録後工事を実施している。西洋土木技術を取り入れた日本土木技術黎明期の鉄筋コンクリート構造物や波浪を考慮した人工島建設技術などの明治期港湾築造技術の先駆事例が多く残されている。

軍事遺構ではあるが、それよりも明治の先駆者が外国に負けないように工夫して作った土木遺構としての技術的価値が特筆した近代化遺産の一つである。



砲台上に建設された灯台と航路監視施設



煉瓦で作られた掩蔽壕

横須賀建築探偵団 富澤喜美枝



半原水源地



上郷水管橋



逸見浄水場

幕末以来、海軍の街として発展してきた横須賀は、今年「横須賀製鉄所開設150年」の節目を迎えました。製鉄所で必要な用水は、慶応元年の製鉄所開設当初、所内の湧水を利用していましたが不足となったため、現在の汐入3丁目府当が谷の溜池から引水、これが軍港水道の発祥となりました。1876（明治9）年には走水系統が完成。日清戦争後、更に軍港施設の拡充・強化が必要となり、水需要が増大したため海軍は新たに水源を求め、愛川町半原の相模川支流、中津川から横須賀までの半原系統を建設することになりました。

軍港水道半原系は、風光明媚な中津川の石小屋と呼ばれる場所（現在の宮が瀬ダムの副ダム石小屋ダム下流）で取水し、500メートル先の水源池までレンガ積みの暗渠で導水、沈殿池を経て横須賀市逸見の浄水場まで送られ、緩速ろ過方式で浄水した後、海軍工廠（明治36年に改称）へ送水されました。水源地のベンチュリーメーター室に取り付けられた銘板には「横須賀軍港水道 起工明治45年2月 竣工大正10年3月」とあり、関係者の氏名も記されています。

半原水源地は標高約129メートル、逸見浄水場は同約58メートルで、約70メートルの標高差を利用した自然流化方式で全長約53キロを一日13000トン、500ミリの铸铁管で送水しました。この間の管路道を「横須賀軍港水道みち」と呼んでいて、愛川町から厚木市、海老名市、綾瀬市、藤沢市、鎌倉市、逗子市を通り横須賀市へと続いています。今回の踏査で、その間に17か所の隧道と大



小 18 か所の橋、独特の景観が知られるまっすぐな急坂、水道用地を示す《山形 2 条と海》や《海》と彫り込んだ海軍の石柱（境界杭）も 308 本確認できました。中でも高低差 42 メートル、全長 1, 4 キロの《みのわ坂》は水道坂として親しまれ、愛川町教育委員会が謂れを記した標柱を立てています。こうして水道みちは田園地帯、工業団地、工場敷地、住宅街、病院敷地、鉄道の下や川の下なども含めほぼ真っすぐに横須賀を目指し、一部の隧道は拡幅され生活道路として現在も利用されています。橋梁の代表格は、厚木と海老名を結ぶ相模川にかかる 10

山形二条と海と刻まれた境界杭 連トラスの上郷水管橋で全長 500 メートル、建設当初の大正初期の商標や海軍マークのある水道管が現存しています。橋梁柱には「大正 7 年 3 月竣工」の銘板が付けられています。これらの用地や施設などは戦後、横須賀市に移譲され、市民の水道となっていました。

半原系統は 2005（平成 27）年 3 月、約 10 年間の休止状態を経て廃止となりました。この壮大で貴重な近代の産業遺産である設備や機材を、湘南国際村水道局倉庫に一時保管し、今後の活用を目指す必要があると思います。